

## 研究結果報告書

所属 国立政治大学日本語学科  
役職 専任教授  
氏名 楊 素霞

### 研究結果

研究テーマ：

1980年代後期以降における台湾と韓国の明治維新論—脱植民地化・民主化プロセスとの交錯—

本研究では、1980年代以降、近代日本の植民地であった台湾と朝鮮半島（主に韓国）において、明治維新をめぐる歴史的議論が、並行する脱植民地化・民主化のプロセスとの交錯の中で、具体的に如何なる形で展開されてきたのかを明確にすることを目指している。

台湾の場合は、民主化運動の進展に伴い、戦後台湾における「明治維新」論は、権威主義体制下の公定中国ナショナリズムを脱却し再構築されていった。日本語世代は、植民地統治を明治維新による「近代」的な成果と見なすような捉え方をしていたが、一方、日本研究者は、民主化運動への参加過程で、明治維新で未完だった諸課題を、国民国家「台湾」を建設する際に鏡にすべきだと主張していた。それを継承する形で、台湾史研究者は植民地期の台湾史研究の前提的作業として明治維新論を展開していった。いずれも国民国家「台湾」の主体性構築というニーズによるものであった。

このニーズとは関係がなく、娯楽性・通俗性の色彩を帯びた明治維新関連図書が多く出版されたが、以上の「明治維新」論の多様性は、中国ナショナリズムの脱却なくしては決して形成され得ない現象であった。

韓国の場合は、1982年の日本歴史教科書問題を契機として、「反日」・「抗日」が明治維新を帝国主義的な「侵略性」と直結して強調する概念であったことに代わって、「克日」は、民主化気運が高まる中で、韓国社会に内在している「近代化への成功」の欲望を含む概念として新たに登場した。

それに続き、「東アジア史」という科目は、2007年改訂教育課程で高校社会科選択科目として開発され、2015年改正教育課程で高校の選択科目として大学入試試験の科目の一つになった。2021年、教育部は、2022年改正教育課程で歴史科目を、①共通科目「韓国史」、②一般選択「世界史」、③進路選択「東アジア史テーマ探求」、④融合選択「歴史で探求する現代世界」に変える方針を打ち出したが、その結果、③と④が入試の選択から除外されることになった。「東アジア史」という科目は事実上消滅し、その15年間の試みは失敗に終わったのである。したがって、「東アジア史」教科書を題材に、2000年代に韓国の世界認識として登場した「東アジア史」の特徴と「明治」認識の関連性を考察することが有意義なことである。それに関する原稿を執筆した上で今年中期中に投稿する予定である。

今後、本研究成果を土台として、研究時期を戦前および冷戦期に遡って、戦前から現在にかけて日本・台湾・韓国が如何に明治維新を捉えてきたのかを考察することによって、東アジアにとっての近代の意味を明らかにし、その成果をここ二年間の間に図書出版という形で公表したい。

なお、2020年4月に住友財団から一年間の研究助成を受けることになったが、新型コロナウイルスのせいで史料の蒐集や口頭発表がなかなか順調に行かなかった。住友財団はこの事情を理解した上で何回もの期間延長などに関する変更申請を許可してくださった。ここで重ねて御礼申し上げます。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

- 1、楊素霞、「民主化移行に伴う台湾における「明治維新」認識の変容」、国際ワークショップ「東アジアにおける明治維新の意味 第三回」(主催：国立政治大学台湾史研究所・立命館大学文学研究所・韓国建国大学校アジアコンテンツ研究所)、2023年2月24日、国立政治大学。
- 2、朴三憲、「2000年代の韓国における「明治」認識—高校社会科教科書「東アジア史」を中心に—」、国際ワークショップ「東アジアにおける明治維新の意味 第三回」(主催：国立政治大学台湾史研究所・立命館大学文学研究所・韓国建国大学校アジアコンテンツ研究所)、2023年2月24日、国立政治大学。
- 3、楊素霞、「民主化移行期・台湾における「明治維新」論の再構築」、日本台湾学会第23回学術大会、2021年5月30日、オンライン(Webex)。

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

- 1、楊素霞、「戦後台湾における「明治維新」認識の再構築—1970年代後半～2000年—」、(韓国)東アジア日本学会編、『日本文化研究』第81輯、2022年1月(KCI)。
- 2、朴三憲、「2000年代の韓国における「明治」認識—高校社会科教科書『東アジア史』を中心に—」、(韓国)東アジア日本学会編、『日本文化研究』第88輯、2023年10月(KCI)(投稿予定)。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

『東アジアにとって近代とは何か—日本・台湾・韓国における明治維新の捉え方』(仮題)、執筆中。